

はじめに・・・

考える
どんなこと
やろうかな？

実践する
こんなこと
やってみよう！

振り返り
実践を振り返っ
て考えよう！

積み上げる
子どもの育ちに
目を向けよう！

検証する
課題を明らか
に、手立て
を具体的に！

準備		研究推進		改善充実		発 展			検 証		
H13 2001 ①	H14 2002 ②	H15 2003 ③	H16 2004 ④	H17 2005 ⑤	H18 2006 ⑥	H19 2007 ⑦	H20 2008 ⑧	H21 2009 ⑨	H22 2010 ⑩	H23 2011 ⑪	H24 2012 ⑫

研究組織・内容・実践の充実

教職員の交流による授業の実施（兼務発令等）

各部会における実践

情報発信

研究会の開催

研究を開始した2001年度（平成13年度）から、11年目を迎えることとなりました。たくさんの課題を乗り越え、素晴らしい成果を積み上げている取組みではありますが、目標でもある「能勢の学校で育った子どもたちが能勢高校に行きたい！」と言ってくれるような教育を展開することができたかという、残念ながらまだまだ道のりが遠いということが明らかになった1年でした。



昨年度、能勢高校の将来を検討する会議を8回開催しました。その中で、議論となったことは「能勢高校は中高一貫選抜において学力検査を実施しないことで、勉強しなくても入れる学校というイメージがついてしまっている。」ということでした。そのため、中高一貫選抜において、学力検査を実施した方が子どもたちも勉強するのではないかということでした。しかし、議論を重ねていくうちに決してそうではないだろうということが見えてきました。

この小中高一貫教育の研究を始めたころに、同様の議論をしました。その時にいわゆる「能勢高校の負のイメージを払拭する」ためには、能勢高校生の学力をあげることだということでした。それは、学力検査によって競争させたり、合否でもって勉強させるのではなく、能勢町内全ての学校でどの子にもしっかりと学力をつけていくことでした。その

上、中高連携により、中学校3年生時で受験勉強を必要としないかわりに、その時間を有効に活用し「生きる力」をしっかりとほぐくむこと、つまり目的を持って高校生活を送る準備期間、つまり将来を見通して自分自身に力をつけていく時間に活用するということでした。

当時のその冊子には、次のように書いてあります。

平成16年当初の選抜方法の理念

『連携中学校から連携高校への進学段階では、一人ひとりが今後の学習目標を持っていることとその学習を支える基礎学力が獲得できていることが重要となる。つまり、中学校における日常的な学習成果や「総合的な学習の時間」のまとめなどに基づいて、生徒のこれまでの学習状況を確認するとともに、今後の学習目的や進路選択について明確にさせることが不可欠である。中高一貫教育における入学者選抜は入学志願者が自らの能力・適性や今後の学習・進路について積極的に考える機会となるよう創意工夫すべきである』

ここからスタートして、小中高をつなぐシラバスが必要だということになり教育課程部会において、いわゆる12年間の学びが一目でわかる「保護者用シラバス」、子どもたちが1年1年の学びを振り返ることのできる「児童生徒用シラバス」そして、12年間の教育をつなぐ「教師用シラバス」の作成をしました。

そして、児童生徒には、1年1年しっかりと振り返ることのできる到達度テストのようなものが不可欠なのではないかということで、ベネッセの学力調査を導入しました。しかし、1年のスパンだけではなくスモールステップで振り返ることも必要ではないかとの意見もあり、その到達度テストの作成に挑戦しましたが、すべての教科において完成させることはできず、一部完成した教科においても十分活用することができませんでした。この理念が、十分周知継続されてこなかったことも、魅力ある能勢高校に負のイメージをつけてしまった原因ではないかと思いました。



能勢高校は昭和20年代に地域の期待を担って開校されました。そして、多くの有為な人材を輩出してきたにもかかわらず、電車、バス、道路などの交通の便がよくなってきた昭和50年前後から、町内の生徒が池田・豊中方面の高校へ多く進学するようになり、その反対に能勢町外から多くの生徒が能勢高校を受験するようになりました。そのため地元とのつながり

や信頼が薄れていき、定員割れにつながっていきました。やがて、学力検査をしても全員

合格することになり、「勉強しなくても入れる学校」のイメージが定着していきました。

平成13年の研究を始めたころには、20%の中退率、停学等の懲戒処分が多い状況でしたが、このイメージを打破して地域の子どもたちのための学校として再出発を図ることを目標に研究を進めました。そして、能勢高校を総合学科として再編し、連携型中高一貫教育校を設置して、当初の文部科学省の中高一貫教育の導入趣旨を十分生かしながら、平成16年に新たにスタートをきることができました。

現時点において学力検査を導入したところで定員割れを起こせばかつての状況と同様になります。そうなれば、中学生にとって能勢高校が魅力ある高校とはならないでしょう。

学力は高等教育においても、社会人として活躍するためにも不可欠です。そして、その自分の学力を知るということは、とても重要なことです。そこで、中学生に少しでも自分のこれまでの学びを振り返らせたいと考え、この3月に、能勢高校へ入学する生徒に対し3教科の学力到達度調査を実施しました。彼らは、少し緊張感をもって学習することの大切さを感じながら、平成24年度の能勢高校の門をくぐったのではないのでしょうか。

能勢高校が町内の児童生徒にとって「あこがれの先輩」が行く学校、私も行きたい、僕も行きたいと言える学校として位置づけることが、子どもたちに安心して学べる学習環境づくりを保障することにつながります。このことは、能勢高校だけが魅力ある学校となっていくのを期待するものではありません。まずは、能勢町全体の学校が活性化すること、そして今の能勢高校の魅力をどのように伝え、どのように生かすか、またどのように魅力ある学校として発展させていくかを教育に携わる方々みんなで考えていくことです。



生涯生きる地に「能勢町」を選択することが、持続ある町づくりにつながっていくと考えます。「自分が好き！能勢が好き！夢がいっぱい」の学校づくりをすすめ、「能勢の宝である子どもたちを、学校・家庭・地域・行政が一体となって育てる」を理念に、今後も能勢地域小中高一貫教育を発展させていきたいと思えます。

成果は着実に積み重ねられています。すべての教職員が一丸となれる最大のメリットを生かして、一人ひとりの子ども達の成長の過程がしっかりと見える12年間のロングスパンの中で、今後も取組みを進めていきましょう。